

持続可能な交流及び共同学習の在り方を目指して

～コロナ禍におけるオンラインを活用した交流会の実践を通して～

○岩切祐司 杉田葉子
(筑波大学附属大塚特別支援学校)

キーワード：持続可能な交流及び共同学習 オンライン交流 生徒間の思いや願い

【目的】

「交流及び共同学習」について、宮野ら（2021）は知的障害児を対象とした交流及び共同学習の実践的な課題を三つの形態（教科交流、行事交流、日常交流）から焦点化し、今後の展望をまとめている。そのうち、行事交流の計画や実施においては定期的・継続的に交流を行うことの必要性を示唆している。

そこで、本研究では、持続可能な交流及び交流学習の在り方を検討し、実践を通じた生徒間の意見を反映しながら柔軟なカリキュラムづくりの指導実践を行うことを目的とする。具体的には、学校間での年間計画、社会情勢や生徒の願いに基づく計画の変更・調整、お互いに可能な実践の模索について検討し、持続可能な交流及び交流学習を効果的に実施することを目指す。本研究の実践事例である交流及び共同学習は、「交流会」として生徒間で認識され例年実施している。2020年度は、コロナ禍にあり、直接触れ合う対面での交流や双方の学校行事の在り方が余儀なく変更された。「交流及び共同学習」の意義・価値を踏まえ、「持続」可能な学習形態・方法、取組み方、柔軟なカリキュラムづくりの実践研究を行う。

【方法】

〈対象生徒〉知的障害の A 特別支援学校中学部 18 人、B 高等学校（普通科）の交流委員会メンバー 23 人
〈研究期間〉20XX 年 4 月～20XX 年 3 月
〈手続き〉持続可能な交流会の内容にするために、「①各学校の分掌担当でのメール・電話、web 会議等での連携。②各校の生徒の思いや願いを尊重した年間活動計画の立案（交流中の生徒の発表、交流会後のアンケートを反映）。③各校の生徒の興味・関心事に配慮したグループ編成。④学校及び家庭の ICT ツールやネットワーク環境を生かした取組。⑤高校生が主体となって企画、進行するために特別支援学校教員からの助言（知的障害のある生徒への基本的な関わり方等含む）。」を主な方策とする。

当初、5 回計画されていた双方の行事（学校文化祭）での移動や乗り入れを伴う交流、対面での文化・スポーツ等の交流に対して、各学校の分掌担当を中心としながら「お互いの学校の生徒にとって実施する意義・価値」を確認し、柔軟なカリキュラムの修正・変更をする。生徒の安心と安全を第一優先にした上で、双方の生徒の思いや願いを反映させた持続可能な交流会の在り方を計画・立案する。生徒の思いや願いは、交流中の生徒の発表や感想、交流会後のアンケートを参考にした。

【結果】

以下、特別支援学校の視点から記載する。A 特別支援学校は、コロナ感染対策のため、6 月に始業（6 月末より一斉登校）。

表 1 交流会の実施内容

第1回交流会 (7月)	【ビデオレターでの自己紹介（ビデオ交流）】 ・コンテンツを動画サイトで限定（期間、閲覧者）公開し、視聴できるように設定。
第2回交流会 (9月)	【自宅からの双方向でのオンライン交流会】 ※詳細は、下段に記載。
第3回交流会 (10月)	【B高校のオンライン文化祭へ参加】 ・オンライン文化祭の楽しみ方を高校生が紹介し、高校生が制作したコンテンツを本校から参加。
第4回交流会 (11月)	【スポーツ・音楽（合唱）交流会】 ・3密の回避、マスク着用・アルコール消毒の徹底。 ・双方の生徒の願いを汲み取り、直前まで対面の交流会を企画していたが、地域の感染状況を鑑み、直前でオンライン対応に変更。
第5回交流会 (3月)	【1年間の振り返り・まとめ】※オンライン ・高校生が主導し、発案したレクリレーションに参加。 ・画面を共有し、協働で思い出アルバムを画面スライド上で制作。

※ 当初の計画を変更し、結果的に全5回オンラインを活用し、実施。

分掌担当は、相手校へ伺って打合せすることはせず、様々な ICT ツールを活用した連携により計画・立案した（表 1）。各校の生徒の思いや願いを生かして、第 2 回は教科的な学習内容を関連付けた各生徒の興味・関心の高い内容や得意な内容を自己選択できるようにグループ編成（表 2）した。また、事後アンケート項目の「次回は、高校生と直接会って交流したい。」意見（94%）を反映させ、第 4 回は対面での直接交流を企画していた。結果的にはコロナ禍における感染拡大予防の観点から、全てオンライン交流となった。

第 2 回の交流会の企画・立案は、高校生が主体となって進行できるように特別支援学校教員がメール等で事前に助言したり、交流当日に web 会議システムのチャット機能を活用して支援をしたりすることで、高校生から特別支援学校の生徒に活動内容を紹介することができた。高校生への助言として、話し掛ける際にはシンボル等を効果的に活用し会順を項立てて示すこと、情報量を制限しつつジェスチャーを付けて端的（3 語文以内）に話をすることを提案した。事前学習による活動の見通し、オンラインの良さを生かした PC 画面の視線の共有、高校生による伝達の工夫、保護者との連携（保護者が必要に応じた言葉掛け）をした結果、特別支援学校の生徒は自宅から交流会を楽しんで参加することができた。

表 2 第2回交流会の活動内容（各グループ）

音読 グループ	生徒間で考えた文章を写真やイラストを用いて交互に読み合う。	造形 グループ	制作中に流れる曲にタイアップし、描画「太陽、虹」。画面上で各イラストを合体。
合唱 グループ	高校生の候補曲から、本校生徒の馴染みのある曲を選定し、手振りをして合唱。	運動・ダンス グループ	高校生発案の動作と動物の動きをイメージ動作を重ねて、曲に合わせてダンス。
合奏 グループ	好きな楽器を選び、高校生のピアノ等の伴奏と合奏。		本校生徒は各家庭、高校生は学校から web 会議システムを活用して参加。

※ 特別支援学校では、学習の見通しがもてるように事前学習をし、保護者とも連携。高校生が主となり、進出した。教員はオンラインで進行や生徒の反応を助言。

【考察】

本研究では、持続可能な「交流会」を実施していくためのカリキュラムづくりを目指し、実践を進めた。web 会議システムを活用する際には、双方の表情や言葉が伝わるように画面の見せ方（ピン止め、ギャラリービュー等）、スライドの示し方を工夫した上で関わられるように支援した。特別支援学校の生徒は、画面上の高校生に気付き、注意を継続することが可能となった。PC 画面に注目して高校生が企画したゲームに参加したり、画面に話し掛ける生徒も見られたりした。また、交流の度に事後アンケートを実施し、生徒の思いや願いを次の企画に反映させた。特別支援学校の生徒には交流会の直後にアンケート項目に基づき対面で聞き取り、高校生には web アンケートで聞き取ることで、オンラインを活用した交流会に関わるカリキュラム開発に生かすことができた。

今後も ICT ツールやネットワーク環境、生徒の思いや願いを尊重した学習環境を整備できれば、多様な学び方、持続可能な学び方を実現することにつながり、インクルーシブ教育の充実が期待できる。本研究の実践やコンテンツを活用しながら柔軟なカリキュラムづくりを継続し、改めて対面での「交流会」の価値も省察したい。

（文献）

宮野、細谷（2021）：知的障害者を対象とした交流及び共同学習の実践的課題と今後の展望。北海道教育大学紀要（教育科学編）、71(2), p. 43-53

（附記）本発表にあたり、所属機関の研究倫理委員会へ書面で提出し、承認を得た。（IWAKIRI Yuji, SUGITA Yoko）